https://www.daitoken.com/ ISSN:0286-6854

大学の図書館

第43巻第1号（No.602）
2024 1

目　次

謹賀新年、そして、大学図書館研究会に積極的に参加を …… 上村　順一 … 1
特集：2023年・こころを揺さぶられたもの・こと
不気味の谷からの脱出 …… 相場　洋子 … 2
2023年こころを揺さぶられたもの・こと=まさかのアニメ（しかもオープニング） …… 久世さとみ … 4
【推し活】の先に…Next-L Enjuではじめる蔵書管理 …… 佐浦　敬之 … 6
燃え尽きない程度にやっていこう …… 佐藤　翔 … 7
2023年、こころを揺さぶられたもの・こと：生成AIとの遭遇 …… 立原　ゆり … 8
「2023年・私家版徒然物語」 …… 永利　和則 … 10
私たちは「自由」になったのだろうか…… …… 村岡　和彦 … 11
「2023年に心を揺さぶられたこと」 …… 目谷　史秋 … 12

大学図書館研究会ウェブサイトの移行 …… 上村　順一 … 13

謹賀新年、そして、大学図書館研究会に積極的に参加を

上村　順一

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

年始早々、大地震と、それに伴う津波が発生しました。被災された皆さま、心よりお見舞い申し上げます。航空機炎上事故もあり、何とも不穏な雰囲気を感じてしまうのは、わたくしだけでしょうか。今年は、是非晴れやかな、楽しい年にしていきたいものです。

自然現象に関わることは、人間が制御できるものではなく、おとなしく従うしかないのですが、そうは申しても、仕事始めが書架の片付け、というか仕事始めの行事なぞできないぞ、という機関も多いかと存じます。どうか安全確保を第一に、そして、早期に開館できることを心よりお祈り申し上げます。本号が刊行される頃には平穏になっておりますように。

さて、特段の行事は行いませんでしたが、会報も通号600号を超えております。ここまで来られたのも、会員各位のおかげだと感謝しております。昨年は、刊行の都合上、2号連続して公開、ということが頻発してしまい、会報編集委員長として、会員各位には大変申し訳なく思っております。幸い、合併号として刊行するまでには至っておりませんが、しかしながら、終期を予定せず、定期的に刊行される出版物のはずの本会報、FREQ=mのはずなんですが、REGLの値が微妙な状況です。より一層の刊行定期化を目指していきたいです。

大学図書館員の減少に伴ってか、当会員も最盛期に比べると、かなり参加人数が減ってしまいましたが、昨今の状況を鑑みると、底を打った感じもします。大図研本体としては、全国大会や大図研オープンカレッジ等の行事を行っていますが、各グループでも、大変魅力的な行事を随時行っております。自己研鑽は、自己の日頃の心がけから、とわたくしは思っております。アンテナを立てておかなければ、この早い時代の流れについていけなくなってしまうでしょう。是非、積極的なご参加をお願い申し上げます。

そして、この会報を図書館経由でご覧になっている皆さま。当会は、『個人加入の全国単一組織』であり、かつ『会員相互の理解と協力を促進し、大学図書館の発展に寄与することを目的』『に賛同する大学図書館員を主体として組織』される、と会則に明記されています。若干、懐は痛みますが、大学図書館研究会員としてのご入会をお待ちしております。

この巻頭言は、全国委員の持ち回りで担当しております。しかし、毎年1月号のみは、慣例で会長が寄稿することになっております。今回は事情により、わたくし事務局長が執筆しております。記録、というものでもないのですが、末筆に記しておきます。

（うえむら・じゅんいち／琉球大学附属図書館）

特集：2023年・こころを揺さぶられたもの・こと

1月号の特集は「2023年・こころを揺さぶられたもの・こと」です。2023年中に読んだ本や聴いた音楽にとどまらず、各種イベント（これも図書館関係に限定しません）や身近な出来事も含めて、2023年に出会ったさまざまなもの・ことの中で「こころを揺さぶられた」経験を会員からお寄せいただきました。

（担当：会報編集委員会）

不気味の谷からの脱出

相場　洋子

昨年11月24日、「第1回ソウゾウの森”大”会議」[1]という、秋田県立大学、秋田公立美術大学、国際教養大学が連携したプロジェクトのイベントが、秋田市で開催された。2022年より続くこのプロジェクトは、“秋田県立大学の「技術力」、国際教養大学の「教養力」、秋田公立美術大学の「デザイン力」を、（秋田県の）恵まれた森林資源の多角的活用に集約し、Z世代を中心に、自治体、民間企業、3大学の学生・教員等との連携により、持続的に資源・人材・経済が循環し、民間投資を誘発する地域社会モデルを構築するもの”だ。ゲストのクロストークが始まったあたりで、乳児のような声が、たびたび紛れ込むことに気づいた。どうも声の主は勝手に動き回っているようで、手招きをして、自分の所へ呼び寄せようとしている出席者までいる。椅子の横からちらりと姿を現したのは、大人の膝丈にも満たない赤ん坊のような、ぬいぐるみのようなロボットで、大きな目を瞬きさせながら呼び主を見上げ、小さな羽のような手をパタパタさせている。それが思わず抱きしめたくなるという、LOVOT（らぼっと）[2]の登場だった。

ヒトがロボットの存在する世界を妄想するのは、今に始まったことではない。洋の東西を問わず、ヒトに代わる身近な労働力とコンパニオンは、いつの時代も求められてきたように思う。英国ダークファンタジーの女王、タニス・リー作『銀色の恋人』[3]の主人公ジェーンに至っては、緋色の髪と銀色の肌を持つアンドロイド、シルヴァーに恋をして、プログラムに過ぎないはずの彼の反応の中に、ヒトらしい感情の芽生えを見出そうとする。裕福な生活を捨てシルヴァーとの生活を選んだ主人公だったが、幸せもつかの間、アンドロイド製造会社は容赦なく、リコール対象となったシルヴァーの回収を決定する、という物語だったと記憶している。機械がヒトの心を持つことができるのか、そもそもヒトの心とは何か、という永遠のテーマは、この後もいくつもの名作で取り上げられ、いろいろな手法で表現されていく。ギターを流暢に弾きこなし、容姿を裏切らない上品な物腰の王子様のようなシルヴァーは、ヒトと同じように学習し、自分の考えを持ってるようだった。しかし早川文庫の初版表紙イラストのシルヴァーは、銀色の発色が悪いせいか、鉄の仮面を被ったロボットにしか見えない。ヒトそっくりといいながら、作者はなんとヒトとかけ離れた色を選んだものか。

過去に、美空ひばりや夏目漱石とそっくりのロボット[4][5]が、制作されたことを覚えて

おられるだろうか。ネット検索すると、等身大ロボットの画像や動画は数多くヒットするが、ヒトの中に紛れ込んでも、全く違和感のないロボットはまだ存在しないようだ。動画のロボットは、一瞬の表情は似ていても、すぐに動きのぎこちなさや、表情の違和感に気を取られやすい。画像のほうも、ヒトと比べて明らかに生気のなさが感じられ、ロボットと判別しやすい。もしかすると私たちは、まだ不気味の谷の底から這い出せないでいるのかもしれない。不気味の谷とは、ロボットの開発が進んで見かけや挙動がどんどん人に似てくると、ある段階で、人がそのようなロボットに対して親近感よりもむしろ不気味さを感じてしまう現象のことを言う[6]。人そっくりのロボットが人にとって全く違和感のない親近感を獲得するにはその谷を越えなければならないというわけである。森の1970年の論文は、2012年にIEEEのジャーナルにも英訳されて掲載されている[7]。義手の開発研究において登場したこの仮説に、懐疑的な意見も存在するが[8]、多くの研究者が関心を示し、この現象の実証を試みている[9][10][11][12]。伊藤[8]は、森が”人との類似度に捕らわれない、非人間的なデザインの推奨“をしていたにもかかわらず、よりヒトに酷似したロボット作成に”執着“する研究者たちにとって不気味の谷が”魅力的な仮説“となり、”研究を進める足場“となったと指摘する。確かに不気味の谷があれば、ロボットの完成度（ヒトとの酷似度）を測定するうえで、目安となるわけだから当然だろう。しかし実証実験に使えるような、完成度の高いロボットは未だ存在しないので、それが不気味の谷から抜け出すルートであると、誰も証明できていない。2017年のCNNの取材で、森は”ロボットを人間の敵とみなさず、仲間として見るという思想“について語り、さらに続けて”将来のロボット工学研究については倫理観が極めて重要“であること、そのためには”進歩や物欲ばかり追求し、外的環境に振り回されてはいけない“こと、一旦、歩みを止めて、内なる心を静かにし、自らの心を自らが制御し、心を自然の状態にすることが不可欠“と語ったという[13]。しかしこの大事なメッセージは、本編動画に含まれておらず、仏教学者でもある森が示した不気味の谷からの脱出ルートが、世界に向けて明らかにされることは無かった。

すっぽりと腕の中に納まるフォルムと、小型の犬や猫ほどの重さのLOVOTは、抱き心地がよくて生きているように温かい。あまり赤ん坊を抱いた経験が無くても、つい顔を覗き込んであやしたくなるような、そんな気持ちを起こさせるのだから不思議だ。頭に付いているセンサーホーンは、強制的に取り外すと動作が停止し、どんなにテクノロジーが進化しても、ヒトが安心してLOVOTと生活できるよう意図的にデザインされた部分なのだという。タニス・リーが不気味の谷を意識していたかどうかは不明だが、ヒトに近い肌色をもたないほうが、愛着を持ちやすいことを、未来の世界では既に証明されているのではなかろうかと、また妄想は広がる。ロボット開発が進むにつれ、ロボットがヒトにとって代わる時代がやってくると、随分前から言われ続けてきた。最近では、生成AIの国際的なルールを定め、その危険性に警鐘を鳴らす動きもみられる[14]。だが人口減少と老齢化が進む現代日本で、ヒトに代わる労働力や、コンパニオンの需要が更に高まるのは、自然の流れだろう。但し私たちが引き続き、自らの欲求を即時に満たすことばかり追い求め続けるのであれば、ロボットや生成AIを“仲間”として受入れる準備ができているとは、とても言えないのではないだろうか。無防備に見つめ返す、腕の中のLOVOTの瞳に映る私たちは、それこそ一体どんな印象なのか。そしてそれは、今後どのようなものに変わっていくのか。不気味の谷を越えて。

（あいば・ようこ／国際教養大学
中嶋記念図書館 専門職員司書）

1）ソウゾウの森. https://akita-sozonomori.com/business/,（参照2023-12-28）.
2）LOVOT. https://lovot.life/play-lovot/,（参照2023-12-28）.
3）Kinokuniya Web Store. “ハヤカワ文庫 銀色の恋人”. https://www.kinokuniya.co.jp/f/dsg-01-9784150116064,（参照2023-12-28）.
4）石黒浩. ロボットと人間：人とは何か. 岩波新書, 2021, p.92-100.
5）福井健策. よみがえる故人たち: 偉人アンドロイド・作家AIと肖像権、著作権、尊厳. 情報通信政策研究. 2021, 5（1）. p.131-144, https://doi.org/10.24798/jicp.5.1_131.
6）森正弘. 不気味の谷. Energy. 1970, 7（4）. p.33-5.
7）Mori, M., MacDorman, K., & Kageki, N. The uncanny valley [from the field]. IEEE Robotics & Automation Magazine, 2012, 19. p.98-100, https://doi.org/10.1109/MRA.2012.2192811.
8）伊藤京平. 不気味の谷の陥落. Core Ethics : コア・エシックス. 2021, 17. p.1-10.
9）植田一博. “不気味の谷とアニマシー知覚から人工物に対する信頼を考える”. 第37回人工知能学会全国大会論文集. 熊本市, 2022-06-06/09. 一般社団法人人工知能学会 , 2023, p.1-4, https://doi.org/10.11517/pjsai.JSAI2023.0_3I1OS4b01.
10）田和辻可昌, 村松慶一, 松居辰則. ”ヒト型エージェントに対する否定的印象の持続的形成に関する仮説モデルの提案”. 第37回人工知能学会全国大会論文集. 熊本市, 2022-06-06/09. 一般社団法人人工知能学会, 2023, p.1-4, https://doi.org/10.11517/pjsai.JSAI2023.0_1K4OS11a02.
11）月元敬. “実在ロボットに対する不気味の谷と心の知覚―感性評価アプローチによる検討”. 第79回日本心理学会大会発表論文集. 名古屋市, 2015-09-22/24. 日本心理学会第79回大会準備委員会, 2015, p. 646, https://doi.org/10.4992/pacjpa.79.0_1EV-086.
12）実吉綾子, 鈴木玄, 小山貴士, & 大久保街亜. “不気味の谷現象における他人種間効果：瞳孔径計測による検討”. 日本心理学会大会発表論文集. 仙台市, 2018-09-25/27. 日本心理学会第82回大会準備委員会, 2018, p.589, https://doi.org/10.4992/pacjpa.82.0_3PM-058.
13）東京工業大学. “ロボコンの創始者・森政弘名誉教授 ロボットの未来を語る ―CNN番組に登場”. 2021-6-26. https://www.titech.ac.jp/news/2017/038483,（参照2023-12-28）.
14）Foo Yun Chee, Coulter M. & Mukherjee S. Europe agrees landmark AI regulation deal. Reuters. 12-12-2023. https://www.reuters.com/technology/stalled-eu-ai-act-talks-set-resume-2023-12-08/,（参照2023-12-28）

2023年こころを揺さぶられたもの・こと＝まさかのアニメ（しかもオープニング）

久世さとみ

まず、このたびの能登半島地震で被災された皆様に衷心よりお見舞い申し上げます。また、いまこの瞬間にも、被災地域で日々の生活を維持する活動に従事されている方々に、心より感謝と尊敬の意を表したいと思います。しがない図書職員ですが、ささやかながらわたくしも日々の業務に取り組むことで、巡りめぐって被災地のどなたかの、なにかしらの一助となれれば、これに勝る喜びはあり

ません。どうか一日も早く、飲み水に心配せず、安心して温かい場所で眠れる日が被災地に訪れますよう、切に祈っております。

今回、テーマが「2023年・こころを揺さぶられたもの・こと」とのこと。つい先日、2023年の全国大会をきっかけに入会させていただきました若輩者にもとっつきやすいテーマかなと思い、1600字の会報原稿を書く決意をいたしました。

いま、原稿に向かいながら、浅慮だったと後悔しております。

テーマをお聞きして、原稿を書こうと決めた私が真っ先に思い出したのは、原作ファンとして（あまり期待せずに）観始めたアニメ「薬屋のひとりごと」の初回オープニングで何故か泣いてしまったということ。あれが私の「2023年・こころを揺さぶられたもの・こと」であったのは間違いありません。曲が良かったんでしょうか。オープニングアニメも素晴らしかったです。「薬屋のひとりごと」は小説投稿サイト「小説家になろう」で掲載されており、Web接続可能な端末をお持ちであれば、誰でも無料で読めます。1出版社から小説が刊行され、2出版社からの漫画出版（漫画家はそれぞれ異なる）、そして今回アニメ版の放映となり、著作権と印税の仕組みがどのようになっているのかとても気になっています。ストーリーとしては、主人公のさばさばした性格が大好きで、薬師としての知識を組み合わせて身の回りの事件を解決に導く様子、また慎重な思考・行動については、レファレンス・サービスにも通じるところがあるなと一人合点しております。

おわり。

となり、いや待てそんなはずはない、2023年の1年の中で心を揺さぶられた瞬間はもっとほかにもあったはず、と2023年の日記を見返したところ、見事なまでの白紙ページの数々。書けている日の方が圧倒的に少なく、書いている内容も家族の些細な一言が面白かっただの、子供の熱が下がらなくて不安だの、学食のメニューがおいしかっただのの他愛ないものばかりで、「こころを揺さぶられた」というほどの劇的な何かがあった、という記述は特に見当たりませんでした。

紙媒体での記録にそのような記述が見当たらなかった以上、もう一度自分の記憶に頼るしかありません。いや待てまずは自分の2023年のイベントを振り返ろう、と気を取り直しました。

2023年、私事ながら2回目の育児休業から復帰しました。職場の皆さんには温かく迎え入れていただき、感謝してもしきれない一方で、子供の急な発熱などで早退しなければならない日や自身の体調がすぐれずお休みをいただく日が続き、年末には繁忙期を見越して一度フル勤務に復帰するも、そのあまりの過酷さに再度時短勤務取得を決意。2023年は試行錯誤とストレス対処に追われる日々でした。産休前と同じ部署であったため、幸いながらスケジュール感覚は掴めており、“攻撃は最大の防御なり”の気持ちで、各種作業を前倒しで進めることができたのは幸いでした。まったく想定外の新規の試みにも参加させてもらうことができ、仕事を任せてもらえるありがたさと、前例のない物事を進める上での段取りなどを学ぶ機会に恵まれた幸運に感謝して、私の2023年は終わりました。

…なんということだ。三十路にもなって「こころ揺さぶられたもの」がアニメのオープニングとは。

けれど実は、年末に見に行った子供向けアニメ映画「パウ・パトロール ザ・マイティ・ムービー」のオープニングでもやはり泣きそうになりました。どうやらアニメイターの熱意に絆される傾向があるようです。

（くぜ・さとみ／大阪大学附属図書館）

【推し活】の先に…Next-L Enjuではじめる蔵書管理

佐浦　敬之

私にとって漫画を読んだりアニメ作品を観たりする…好きな作品に関連するイベントに参加したり色々なコンテンツを収集してコレクションを構築したりする…いわゆる「推し活」は生きる楽しみの一つである。手元に残しておきたいと思った原作本やアニメ本編のBlu-ray Disc（以下BD）などをメインに収集するが、「推し」の度合いによっては、主題歌・キャラクターソング・サウンドトラックなどのCD、画集・設定資料集・ファンブックなどの関連書籍、ノベライズ・コミカライズ作品、ライブイベント・舞台公演のBDやパンフレット、作品テーマに関連する専門雑誌、グッズや同人誌（二次創作の他に原作者のオリジナル作品など）、同じジャンルの他作品に手を出してしまうことも多い。

直近の例では2018年10月から12月にかけてアニメが放送された「やがて君になる」（仲谷鳰著・KADOKAWA刊・全8巻）にハマったときには、ファンイベントに参加して生まれて初めて舞台公演を観劇して舞台公演のBDとパンフレットを購入した。2022年10月から12月にかけてアニメが放送された「ぼっち・ざ・ろっく！」（はまじあき著・芳文社・既刊6巻）にハマったときには、普段手にすることがないギター専門誌「Guitar magazine[1]」で劇中バンドの「結束バンド」が特集された号や「結束バンドLIVE-恒星-[2]」のBD、（レコードプレーヤーを所有していないにもかかわらず）「結束バンド」のアルバム曲が収録されたLP盤を購入した。

これまで気の赴くままに様々な作品や関連コンテンツを収集してきたが、作品数も資料の種類も冊数も多くなり全体を把握するのが難しくなってきた。手元にどんな資料がどれだけあるのかを把握して、複本の整理やシリーズ内の購入漏れを見つける取っかかりにすべく、Project Next-L（https://www.next-l.jp/）で開発が進められているNext-L Enju（以下Enju）を用いて蔵書管理を始めることにした。業務で目録を担当するようになってから[3]出版物を手にする度に「目録を採る際にはどういう記述になるのか」と意識するようになり、趣味と実益を兼ねてシステムや目録規則に対する技術や知識を習得したいと考えるようになったことが動機の一つである。高校生の頃から自分の蔵書目録を作りたいと思っていたが、それを実現するために必要なツールと知識が最近になってようやく揃ったのである。Enjuが1.4にバージョンアップしてアプリケーションの配布方法がDockerによる配布に変わり環境構築が容易になったことも蔵書管理を始める決め手になった。

Enjuの最大のメリットは国立国会図書館（以下NDL）のNDLサーチから書誌情報を取り込んで手軽に登録できる点だと思う。図書ならISBN、視聴覚資料なら発売番号などで検索して書誌情報を流用することができる。手元のレシート（ISBNやJANコードの記載あり）や通販サイトの購入履歴を手がかりに2023年2月頃から登録を開始し、12月末の時点で冊子体2406件（うち逐次刊行物30件）、ビデオディスク300件、オーディオディスク79件、オンラインリソース49件、全体で2834件の書誌を登録した。手元のほとんどの資料はNDLサーチから書誌情報をインポートして登録することができた。そこに視聴覚資料の検索に便利なJANコードや発売番号などを追加して、資料種別を問わず現物との紐付けを行うときに検索しやすい書誌を作成してから購入記録を元に所蔵登録を行っている。この過程で（把握できた範囲ではあるが）思っていた以上にアニメ作品の視聴覚資料がNDLに納本されていることがわかった。日常業務では漫画や視聴覚資料を取り扱うことは少ないので、書誌記述の参考になる

点も多かった[4]。

NDLサーチから書誌がインポートできない、つまりNDLに納本されることが少ない資料としては同人誌が挙げられる。NDLサーチで検索すると、タイトル・著者名・出版者名（サークル名？）・出版年月（同人誌即売会の開催時期と重なる）・出版地（[出版地不明]が多い[5]）・資料形態（大きさが26～30cmでページ数が少なめかページ付が無い）などから同人誌と思われる書誌が見つかるが、同人誌即売会や同人誌専門書店で取り扱われている同人誌の数からするとかなり少ないように感じる。また目録を採るために実際に同人誌を手に取ってみると、所定の情報源に十分な情報が揃っていなかったり情報源によって表記が異なることが多く本タイトルや責任表示の採り方に迷う事が多い。組織化する上ではジャンルや原作によるタグ付や分類方法なども検討する必要があるだろう。

原稿執筆時の2024年1月現在、日本目録規則2018年版（NCR2018）に対応するNACSIS-CATコーディングマニュアルおよび目録情報の基準の改定案についてパブリックコメントが募集されている。遅ればせながら「実際に目録を採るとき」を想像しながらNCR2018と改定案を見ながら勉強しているところである。自分の蔵書を管理する上では必ずしも厳密に採る必要はないのだが、業務にも活かせるようにNCR2018の理解を深めていきたい。

1 現物を手にしてISSNが付与されていることを初めて知った。商業誌でISSNが付与されている雑誌はあまり見たことがなかったので驚いた。
2 2023年5月21日にZepp Haneda（TOKYO）で出演声優4人とプロのバンドメンバーが共演するワンマンライブが開催され、音楽業界からの注目度も高かったという。チケット購入競争倍率の高さやライブ開催地まで直接参加できるほどの体力がないなどの事情からオンライン配信での参加としたが自宅で思いっきり盛り上がった。
3 本格的に目録を担当するようになったのは「CAT2020」以降である。
4 NACSIS-CATのコーディングマニュアルや目録情報の基準とは異なる点もあるためそのまま業務に応用するのは難しいとは思う。
5 かつては発行者の連絡先として同人誌の奥付に住所氏名を記載する習慣があったらしいが、近年では住所等を記載せずにWebサイトのURL・メールアドレス・SNSのアカウント名等を記載することが一般的になったため[出版地不明]と記録していると思われる。

（さうら・たかゆき／信州大学附属図書館）

燃え尽きない程度にやっていこう

佐藤　翔

2023年は自分の読書人生における大きな画期であった。元々、自宅も研究室もすでにスペースが枯渇している（というか、今や自宅に自分専用の書架はない。それ以前に自分の部屋もない）こともあって、小説や漫画の類はこの10年ほど、できるだけ電子書籍版を買うにしていた。しかし研究にも使うようなノンフィクションや研究書の類は、やはり紙をめくって読む方が馴染む。そう思ってずっと印刷版を買っていたのだが、まったく理由はわからないものの昨年の半ばから急に、そうした資料でも電子版で利用するのが苦でなくなった。そうなるとちょっとした時間に、純粋なエンタメ目的以外の読書もできるようになる。特に我が家の場合、なかなか眠ろうとしない子どもの寝かしつけ時間（下の子は下手をすると寝室に行ってから眠りに

落ちるまで1時間を要する）に読書が捗るのは非常にありがたい。暗くした部屋で紙の本なんて読めないし、そもそも子どもの相手をしながら本を開いて読むなんて無理である。その点、スマホなら暗くても読めるし、片手で読める。本を開いていると邪魔しに寄ってくる子どもも、スマホを見てる分には特に興味を持たない。画面が小さいのでレイアウト固定式の本を読む気はあまりしないが、画面サイズにあわせて文字サイズを変えられるフォーマットならばまったく問題ない。おかげで昨年は読書が捗った……未だに電子版が出ていない本も多いのが、残念なところではあるけれども。

中でも心に残った1冊に『なぜ私たちは燃え尽きてしまうのか　バーンアウト文化を終わらせるためにできること』[1] がある。神学の教授として終身在職権も得た身であったにもかかわらず「燃え尽き」、仕事を辞めざるを得なかった著者が、燃え尽き＝バーンアウトについて多様な角度から検証し、それが単なる個人の問題ではなく現代社会の労働文化に組み込まれた、必然的な帰結であることを明らかにする。そのうえで、その「バーンアウト文化」にどうすれば対抗可能であるかをいくつもの事例にあたりながら考えていく……という本である。

自分もまた大学教員として、他人事ではないかもしれない……と読み始めたのだが、正直なところその危惧は、著者自身が燃え尽きるまでの体験を読んで霧消した。著者は教育にもその他の仕事にも真摯で、それだけに学生に授業内容が響かないこと等に強い無力感を覚え、それでも自分の理想像に従って熱心に工夫を重ねるも結果ははかばかしくなく、ついには燃え尽きていく。それが著者個人の特質ではなく、労働による自己実現にこそ至高の価値を置く現代社会の文化の問題なのだということを喝破していく点に本書の特徴があるわけであるが、自分個人の人生を考える上では、「なるほどこの著者みたいに真面目にやっていくとやはり燃え尽きるのか。くれぐれも気を付けよう」という思いを強くした。元々、家庭を持ってからは「人間性を大事に」を合言葉に暮らしてきたが、時には肩に力が入ってしまいそうなときもある。しかしそれは危険である。燃え尽きないためにも、やはり人間性をこそ大事に、「労働の殉教者」となることなくこれからもやっていこう、という思いを新たにする一冊であった。2024年もこれを心がけていきたい。

なお本書の中では司書（図書館員）もまた、燃え尽きが報告される職業の一つとして紹介されている。燃え尽きやすい人間像も、職業熱心な多くの図書館員の皆さんに重なるところがある。本書中にはその処方箋も書かれている（正直な感想としては、処方箋部分はいささか心もとないが……）。理想を胸に燃え尽きてしまう前に、一読されることを大学図書館関係の方々にはおすすめしたい。

1）Malesic, Jonathan. なぜ私たちは燃え尽きてしまうのか　バーンアウト文化を終わらせるためにできること. 古嶺英美訳. 青土社, 2023, 360p.（kindle版）

（さとう・しょう／
同志社大学免許資格課程センター）

2023年、こころを揺さぶられたもの・こと：生成AIとの遭遇

立原　ゆり

2023年といえば、生成AIが世界に急速に浸透し、社会のさまざまな領域で盛り上がりを見せた年だった。この号の特集テーマは「2023年・こころを揺さぶられたもの・こと」。心がないはずのAIに「こころを揺さぶられた」という表現をするのは皮肉で、特集テー

マの趣旨とも少しずれてしまっているかもしれない。しかし、将来2023年がどんな年だったのかを振り返った時のために、この年は生成AIが大きなインパクトをもたらした年だったということを、この機会に記しておきたいと思った。

この原稿を書いているちょうど1年前の今頃は、生成AIの一つであるChatGPTが流行り始めた頃だった。私も流行に乗る形で適当な質問を投げてみて、ChatGPTの機能を試してみることからスタートした。そのうち、職場でもAIツールの導入が進み、議事録やメール文章の作成、データ加工、アイディア出しなど、さまざまな場面で生成AIを活用するようになり、今では何かと頼ってしまうツールになっている。

しかし、生成AIはただ便利なツールであるというだけではない。生成AIを活用する中で、ツールとの付き合い方や働き方について考えるきっかけとなったからだ。以下、その変化をいくつかあげたいと思う。

まず一つ目は、効率についてより意識するようになったことだ。その作業は自分で手を動かしてやるべきことなのか、もっと効率的な方法は存在しないのかという視点を持つようになった。やるべきことはたくさんある一方、人手や時間は有限である。さらに、従来の仕事に加えて新しく取り組まなければいけないこと、考えたいこともある。そういう場合、時間を捻出するために、作業にかける時間を圧縮し、優先順位をつける必要がある。「タイムパフォーマンス」に偏重するのはよくないと思うが、生成AIの力を借りて多くの作業が効率的に進むと実感したことで、自分が費やす時間について以前より意識するようになったと思う。また、これはある意味ではAIに置き換えられない、AIに奪われない仕事とはどういうものなのか、という危機感の表れなのかもしれない。

二つ目は、人に何かをお願いする、指示を出す能力が鍛えられていることだ。ChatGPTは「何か方法を教えて」とか「アイディアを出して」といった丸投げの質問に対しても答えてくれる。しかし、具体的で的確な回答を得るためには、適切な前提や条件を設定し、また何度もやりとりを行うことで情報を深堀りしていく必要がある。何をしてほしいのか、意図や期待している成果を明確にして言語化することは、自分の頭の整理にも繋がるし、これは同僚や、将来部下を持つ時のコミュニケーションに活かせる良いトレーニングになっていると思う。

そして三つ目は、生成AIが教育や図書館の情報サービスに対して与える影響だ。2023年には、教育における生成AIの利用について、各大学・協会・文部科学省からガイドラインや声明が発表された。学校教育でも生成AIが活用されるようになり、これからは生成AIをうまく活用しながら学んできた学生が大学に入学してくることになる。図書館で契約している製品にも、少しずつAIの利用が浸透しているし、大図研の例会や図書館総合展などでも、生成AIについての議論が盛んに行われた。GoogleやSNSが私たちの情報行動に大きな変革をもたらしたように、生成AIも同じような存在になるかもしれない。様々な情報が容易に入手できるようになる中で、大学図書館がどのような貢献ができるのか、大学図書館自身も技術を活用しながら考えていく必要があると思う。

以上が、生成AIとの出会いにより2023年を終えて思うところだ。生成AIに過度な期待は禁物だし、まだまだ多くの不確かさがあるが、もはやこの技術から目を背けることはできないと思う。今後の動向に注目したい。

（たちはら・ゆり／東京大学附属図書館）

「2023年・私家版徒然物語」

永利　和則

「2023年・私家版徒然物語」としてとりとめもないことを書いてみます。

1月29日(土)には2019年に大規模リノベーションされた県立長野図書館に行きました。平賀研也館長（当時）の下、「信州・学び創造ラボ」として生まれ変わった3階フロアは、あらゆる世代の利用者が多くの情報にアクセスしやすい工夫と、アクセスして得た知識・情報がお互いに化学反応を起こすことで、新たな知識・情報が創り出せる・創り出させる仕掛けが施されていると感じました。また、県立長野図書館と県内77市町村が協働運営している電子図書館「デジとしょ信州」は、機器の維持管理と電子書籍のライセンス料など運営コストの問題を解決しながら、読書バリアフリーへの対応や児童生徒のタブレットの活用を図るなど優れた手法だと思います。

3月10日（金）から3月12日（日）まで、熊本大学合唱団の同期（1975年～1978年）会が初めて京都でありました。東は千葉から西は熊本まで同期20名中12名が参加しました。再会直後はだれか思い出せなかったり、大学卒業後のそれぞれの略歴やエピソードを聞いたりして、40年以上の時の長さを感じました。この催しをコロナで見通しがつかないにもかかわらず、1年以上前から計画し、宿の手配や細かな日程設定をしてくれた幹事役のO君は、頭が下がる思いです。

12月16日（土）は、太宰府市いきいき情報センターで開催された「キャンパスフェスタ2023」に参加しました。太宰府市は、1998（平成10）年から市内の5大学･短大（日本経済大学、日本情報大学、筑紫女学園大学、福岡こども短期大学、福岡女子短期大学）と共に「太宰府キャンパスネットワーク会議」（https://www.city.dazaifu.lg.jp/site/dazaifucampus/）を設けています。この会議は、市民の生涯学習の振興と地域に開かれた魅力あるキャンパスシティの創造を目的としており、太宰府市と5大学・短大との連携協力に関する協定の締結、加盟大学の代表学生からなる「学生連絡会」の結成や連携・情報共有のための各種会議（総会、幹事会、運営会議、学生連絡会）の開催などにより、キャンパスフェスタの実施、学生のイベントの参加やボランティア活動が盛んに行われています。運営会議メンバーの日本経済大学の竹川克幸教授は、この取り組みを学会発表して大変注目を浴びたと話されていました。また、昨年度からは、年5～6回の運営会議にも市内の4高等学校もオブザーバー参加するようになり、高大連携が一層図られるようになりました。

12月17日（日）は、第14回全国大学ビブリオバトル～首都決戦～（会場:昭和女子大学、https://zenkoku.bibliobattle.jp/）に出場した学生の応援に行きました。彼女は、九州ブロック予選と九州ブロック決戦を勝ち抜いて、初めて本学から全国出場を遂げた学生でした。残念ながら、セミファイナル敗退でしたが、ビブリオバトルの楽しさと魅力は十分味わってくれたと思います。本学の文化教養学科では7年前から学生のプレゼン力、コミュニケーション力などの向上を目指して、1年生の授業にビブリオバトルを導入しています。元来、ビブリオバトルは、親しい仲間内でお互いに本を紹介する時に、より楽しく選ぶ方法として考案されたゲームですので、人前での発表が苦手な学生でも安心して取り組めるように、4、5人の小グループが車座となり和気あいあいとした雰囲気で行っています。そして、小グループでチャンプ本（一番読みたいと思った本）を獲得した学生たちが、全国大学ビブリオバトル2023のブロック予選を兼ねたビブリオバトル大会に出場しているのです。

10月には何度もモーニングコールをして

卒業させたゼミ生、12月には無理して1年間本学に残っていただいた先生、そして40年来の合唱仲間だった先輩と、2023年は親しくしていた方が突然亡くなりました。悲しさよりも悔しさでいっぱいです。繰り返される何気ない日常が大切で愛おしく思える出来事でした。

（ながとし・かずのり／福岡女子短期大学）

私たちは「自由」になったのだろうか……

村岡　和彦

「老生（わたし）」とSNSでは自称していますが、今年の誕生日を迎えると齢七十となります。大図研歴は長いのですが、学ばせていただくばかりの幽霊会員です。いただいたお題は「2023年・こころを揺さぶられたもの・こと」。老生は公共図書館畑の人間で、「図書館の自由」「多文化サービス」などを中心に業界に関わっていたことから、そういう堅苦しい話題になることをお許しください。

ある出版行為があり、それに対する抗議があり、出版社がそれになんらかの対応をし、そして図書館では？…という経過を辿るのが「図書館の自由」Issueの定番コースのひとつですが、老生の意識にある最近半世紀の動きの中での大きな変化は、抗議を行う側の行動様式です。以前はストレートに「ケシカラン、出版するな！回収しろ！」でした。あるいは「焼け！」という反応もあります。そこだけを見ると、抗議する人たちの異常さを感じるかも知れませんが、社会全体として出版への抗議の仕方にも受け止め方にも不慣れな時代のことだとも思えます。例えば「焼け」という「焚書坑儒」を思わせる一見野蛮な要求も、1975年にその存在が公になった「部落地名総鑑」に関わっては、これをどうするのかと問われた国の機関が「焼く」と回答しているという事例もあります。なにも抗議する側が野蛮だということでもありません。

当時は就職（雇用）や結婚する時、被差別部落出身者を避けるのは当然とする認識が根深くあり、その前提でのハウツー本ばかりでした。それらは「差別図書」と呼ばれました。ただ、歴史研究書や地域史の中での被差別部落についての関連記述も、賤称語があるというだけで「差別図書」とされるようにもなってしまっていました。現在でも意識の混乱はまだまだ残ってはいるものの両者は異なるものと認識されますが、当時は、抗議する側ばかりではなく抗議される側も、そういった事象に対する適切な着地点を模索しなければならない段階だったのです。

その後、抗議の仕方についても、それを受ける側の行動様式も変化し続けています。2023年には大きな変化を感じさせる事例がありました。抗議する側が変われば、抗議を受ける側も変わります。ただそれが、適切に呼応するわけでもありません。

2023年12月3日、『あの子もトランスジェンダーになった』（KADOKAから2024年1月24日出版予定）へのある出版関係者からの抗議文が公開されました。そこでは、単に原著者がアメリカで有名なヘイターでありアメリカでも批判が相次いでいることを紹介した上で「［同書の翻訳出版という］事態を憂慮しています。」と伝えただけの内容でしたが、出版社は即座に（抗議文を受けた翌日）出版中止を表明したのです。

https://twitter.com/koba_editor/status/1731563521719337035

https://www.kadokawa.co.jp/topics/10952/

この出版社の「お知らせ」文には「お詫びとお知らせ」というタグが付けられており、これをクリックすると、2018年01月16日まで遡る「編集上の不備」「製本不良」等についてのお詫び記事が列挙されています。「編

集上の不備」が、大幅な表現変更でもあり得るのは周知の事実ですが、ここでは法務案件として極めてクールに処理されています。一方で、抗議自体が大きな圧力を加えたような印象批評もネットでは多く見られました。

抗議する側／される側、自分事として慎重に読み解いていかなければいけないようです。

（むらおか・かずひこ／
公共図書館定年退職者）
Muraoka.kaz@gmail.com

2023年に心を揺さぶられたこと

目谷　史秋

2023年の年始、所謂旅行系YouTuberが撮影した旅行の動画を見ていた時のことだ。コロナ禍で海外に行けなかった時期に旅行気分を味わうことができたのをいいことに、コロナが明けても時々視聴していたのだった。

そんな中、ある動画が目に止まった。バングラデシュを旅する動画で、撮影者がダッカの街中を歩いていると、見ず知らずの尋常ではない数の人々から挨拶や声をかけられている。南アジアに行ったことがない私はこれほどフレンドリーな文化を未だかつて目にしたことがなかった。そういえば向こうで外交官を務めている友人も「日本に帰れなくなる」と言っていたような……。漲るエネルギーに溢れる笑顔。学校を訪れると瞬く間に子どもたちが群がってきて大騒ぎだ。

自分も東南アジアから来た学生へ図書館内をガイダンスしたときの感動に満ちた彼らの目を忘れることはないだろう。しかし、何よりもやはり、コロナ禍で失われていった人との触れ合いや挨拶の力である（まさに……あけましておめでとうございます！と口にしたくなるほどだ。）

そういえば、自分も東南アジアをバックパックしていた時に夜行バスを降りた近くのバス停で出会ったおじさんが声をかけてきてくれて色々案内してくれてご飯もご馳走してくれたっけ…。フランスではストライキが起こっていた冬のパリのバス停で長い間バスが来ない中、「ストライキだから仕方がないわ。」と口にして温かい目で見つめながら長話をしたMadame。凱旋門のカウントダウンの時に一緒に抱き合って新年を祝ったアフリカ系や中東系の人々。クリスマスイブの早朝にTGVの中で声をかけてくれた台湾の青年（今は友人である）。イギリスのコッツウォルズをバスで色々案内をしてくれたGrandma。イギリス行きの機内で「私の実家はケンブリッジの近くにあって……これは地元のチョコレートよ。どうぞ。」と言って恵んでくれた、隣に座った帰省途中の女性。

もちろん日本でも、北海道を周遊していた時にラーメン屋を一人で切り盛りしているおばあさんはお代を負けて飲み物までくれたし、大学図書館研究会をはじめとする仕事関係の団体で出会った皆様は本当によくしてくださった。

こうして比較的私にとって最近の旅を中心に、見ず知らずの人との初対面の数々が連なるように思い出されたのだった。

バングラデシュの動画を目にしてからほぼ1年が経った2023年の暮れ、私はフランスのエマニュエル・マクロン大統領が出演したフランスのテレビ番組「Càvous」を見ていた。言っていることの良し悪しは置いておいて、時間が経つにつれてエネルギッシュさが漲っていく。その後に、この文章を書きながら世界各地の新年カウントダウン生中継を見ている。

やはり様々な人や文化に触れることはやめられない。また、旅に出たい。空間の旅である。様々な文化に触れるためには時空を渡らねばならないが、時間を渡るためには書物が中心的な役割を果たす。業務においては、よ

り国際的な研究機関を目指す本学においてどのようにそれに自分が寄与できるのか、そんなことも考えている。明日も何かに心を揺り動かされ、その後もまた様々な人や物事に心を揺り動かされるだろう。さぁ、明日はどんな出会いが待っているのかな。

（めたに・ふみあき／
横浜国立大学附属図書館）

大学図書館研究会ウェブサイトの移行

上村　順一

1. はじめに

大学図書館研究会員ならば、1日1回とは言わないまでも、何回か大学図書館研究会の公式ウェブページを検索、表示させることがあるでしょう。

この大学図書館研究会ウェブページ、さくらインターネット株式会社のレンタルサーバをお借りして運用しているのですが、今般、会員がみえないところで若干の進化を遂げたので、その内容について、記録がてらご報告申し上げます。

2. ことの起こり

大学図書館研究会ウェブサイトが、いつから運用開始されているのかまでは調べきれなかったのですが（目次検索システムで検索したのですが、見つけられませんでした。たぶん脇が甘い検索をしている気がします。）、現行ウェブページ「お知らせ」の最下部に、「2012.7.2 Webサイトをリニューアルしました。」とあります。つまり、少なくとも10年以上は現行のUIでの運用を続けてきているものと考えられます。「リニューアル」とあるとおり、大図研のことですから、WWWが一般的になるよりもかなり前から存在していた気がします。当会員は、今も昔も結構新しモノ好きですからね。

さて、この大学図書館研究会ウェブサイト、実はやや曖昧な運用をしていました。それは、通常の会務を担当する常任委員会が、大学図書館研究会ウェブページを更新するのは当然として、支部（現行ではグループ）でもウェブページの更新を認めていたのです。この運用がいつから開始されたのか、は調べることができなかったのですが、かなり前からこのような運用をしていたようです。少なくとも直近では、東京・京都・九州の地域グループが該当しました。

3. マルチユーザ化への道

管理主体が複数人で、それぞれのウェブページを更新できる環境は、余り穏やかではない、と考えていました。なにかあった場合、管理上、ゆゆしき問題が容易に想定できます。

ゆえに、それぞれユニークなIDを用いてウェブページを更新できる環境に再構築する必要があると考え、常任委員会では、大学図書館研究会ウェブサイトの再構築の必要性を、近年ずっと課題としていました。

会員総会資料を熟読されている会員だと見覚えがあるかもしれませんが、2018年開催の、第49回全国大会（九州大会）会員総会の、一般財政の予算案から、調査費や移行費を目的として、移行に係る費用を「雑費」として毎年計上してきていました。毎年予算計上しておきながら、実施が昨年になったことを、ここで会員各位に深くお詫び申し上げたいと存じます。

また、このことを常任委員会では「マルチユーザ化」と称していますが、このマルチユーザ化の体制が整うまで、グループからの新設ウェブページの申請をお断りせざるを得ず、せっかくのdaitoken.comでの情報発信をできなくしてしまったことを、今でも反省して

いるところです。このドメイン名で情報発信をするということは、一種のブランドイメージ向上に当たるものですから、ご相談くださったグループには改めてお詫び申し上げたいと存じます。

4. 移行への検討

さすがに何年も予算化して執行できないのは、会員各位に説明もできないので、意を決して、2022年12月11日2022/2023年度第3回常任委員会にて、「大図研Website移行に伴う問題点の洗い出し」として、文字どおり、移行に係る問題点と、移行にあたり考慮すべきことを事務局で洗い出した上で審議事項として提起しました。

問題点・考慮点として、以下の4点を挙げました。

・マルチユーザが採用できること
・サーバSpecは現状同等でよいこと
・MLが無理なく移行できること
・将来的に移行が可能なCMSが標準でついていること

常任委員会で議論の結果、洗い出しの結果を是とし、では次にどこのレンタルサーバに移行するか、ということを検討するために、2023年6月18日開催の、2022/2023年度第9回常任委員会にて、「大図研Website移行に伴う問題点の洗い出し【その2】」として事務局から提示し、審議事項として比較検討しました。

・さくらインターネット
・エックスサーバー
・Zenlogic ホスティング

常任委員会で議論の結果、同じ会社ではあるものの、さくらインターネットを用いることにし、それまでに使用しているサーバが毎年9月で契約更改の時期を迎えることから、2023年6月から9月までに移行作業を事務局で行うこと、という審議結果を得ることができました。

5. MLの移行の考慮不足

ウェブページの移行は、前述のとおり、予算を頂戴していたことから、移行先の新サーバを先行して調達できました。会員総会での、予算措置に対する会員のご判断を改めて感謝申し上げます。

ウェブページは、新サーバにまずそっくり旧サーバに載っている内容をcopyして、旧サーバから新サーバにDNSを切り替える、という過程を経れば移行できる見込みが立ったのですが、一方でMLの移行、すなわちMLにある、過去のML メッセージ（メール）をどのように保存、公開するか、の具体的手法についての考慮が漏れていることに、後から気付きました。

さくらインターネットは、ウェブページのユーザと、MLのユーザとが密接に関連していて、まずその関係性を新たに洗い出す必要があることを認識し、この部分の洗い出しは、ウェブページの移行よりもはるかに遅い着手となってしまいました。結果的に事務局ML担当にかなりの業務負担を強いてしまいました。今でも申し訳なかったと反省しております。

6. 具体的な移行作業と使ったtool

作業そのものは、会員に告知して、作業できる方を募る方法もあったのですが、2023年6月から、旧サーバの契約期間の制約から、最長でも同年9月末までと、比較的短期間に移行を完了しなければならないことから、本業で実務を担当しているであろう方々に作業のお手伝いをお願いすることにいたしました。お願いされた方々には、それでなくても忙しいのに、申し訳ないことをしたと、反省しております。反省ばかりですが、このPJ、実は反省しかないのです。こんなところで書く話ではありませんが。

少人数とはいえ、何が喫緊の課題なのか、いつまでにそれを解決しなければならないのかということをメール等で管理するのは大変

です。そこで、無償版のbacklogをお借りして、これで全体の課題管理としました。

たまたまですが（いや、そうではなく意図的かも）、前述の方々は、backlogを使えている方、ということも考慮した点でもあります。

移行作業は順調に進めることができた、という印象を、改めて完了化したticketが載っているbacklogをみて思った次第です。本項冒頭で、『会員がみえないところで若干の進化を遂げた』と、記載しましたが、そのことを指しています。ただ、1点、大反省点がありまして、DNSの切替をしくじり、本来であれば無停止でウェブページの移行ができたところ、約1日間、大学図書館研究会ウェブページが完全にみえない状態にしてしまいました。もしお気付きの会員がいらしたら、お詫び申し上げます。

7. 会員（グループ）への説明責任の重要性

この移行作業の過程で、事務局が今まで如何にグループに説明を怠ってきたか、ということを痛感いたしました。冒頭の、グループ管理のウェブページに繋がるお話しです。

ウェブページでは、前述のとおり、申請を受け付けつけているのかいないのかもはっきりしておらず、また、MLについても、その設置や廃止、メンバ交替などの申請を受け付ける情報が全くと言っていいほど、グループに示されていませんでした。

そこで、遅ればせながら、それらの各種申請に係る手順整備を行い、事前の常任委員会の審議を経て、2023年12月24日開催の、2023/2024年度第2回全国委員会にて、

・大学図書館研究会ドメインの公式ウェブページをグループ等に解放する案
・メーリングリスト及びメールエイリアスの申請に係る受付改善案

をそれぞれ審議事項として提起し、審議の結果、了承されました。

また、この審議事項を提起する過程で、会員向けの運用手順書（ユーザーズマニュアル）をいくつか作成いたしました。実際にこのマニュアルを用いて移行作業をすることで、マニュアルのbugは潰したつもりですが、もし、お気付きの点がありましたら、事務局までお問合せくださいますと幸甚に存じます。

8. おわりに

この一連の作業は、当初は事務局長だけでできるかなと思っていたのですが、当然のことながらそれは甘い考えで、思いのほか考慮すべきことが発生してしまいました。

具体的には、北海道地域グループの磯本さん、中筋さん、九州地域グループ坂本さんに、支援をお願いしました。

磯本さんと中筋さんは、常任委員なので半ば仕方がなくお付き合いくださったものと思っています。また、坂本さんはご都合により中途で離脱されたのですが、いくつかの貴重なご示唆を頂戴し、わたくしとしては、大変感謝していることを表明いたします。ありがとうございました。

DNS作業は、一貫して筆者である事務局長が担いました。ですので、前述のウェブサイトがみえなくなる事故は、筆者に全面的に責があります。が、この作業のおかげで、ちょっとDNSに詳しくなった、という利点も生まれました。

末筆になり恐縮ですが、関係するグループ各位に改めて深謝申し上げます。

（うえむら・じゅんいち／大学図書館研究会事務局長・琉球大学附属図書館）

大学の図書館　第43巻第1号（No.602）　2024年1月25日（毎月25日発行）　ISSN：0286-6854
編集・発行：大学図書館研究会　年間予約購読料：送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部（出版物購入・問い合わせ窓口）
〒305-0033　茨城県つくば市東新井10-1-111　マザータンク気付
E-mail：shuppan@daitoken.com
＜出版物購入代金等振込先＞　三菱UFJ銀行 越谷駅前支店　普通口座：1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局
〒105-0013　東京都港区浜松町2-2-15　浜松町ダイヤビル2F
E-mail：dtk_office@daitoken.com
＜会費振込先＞　ゆうちょ銀行　振替口座：00190-2-79769　大学図書館研究会

議事要録

2023/2024年度 第4回常任委員会

日時：2024年1月21日（日）-2024年1月28日（日）
場所：メール審議（フォーム回答）
出席者（敬称略）：
呑海，赤澤，上村，有馬，北川（以上，常任委員），青山，磯本，澤木，渡邊（以上，常任（特定）委員）

◆議事の詳細は以下からご覧ください。
https://www.daitoken.com/committee/

組織通信

10-12月分（2023/10/1-2023/12/31）
（敬称略）

○入会

東京地域グループ	和泉　真理
東海地域グループ	長野　祐子
京都地域グループ	山岸　瑶果
大阪地域グループ	久世　さとみ
無所属	青木　真奈

○退会

東京地域グループ
後藤　暢（2022/2023末除籍）

以上、現勢340名（2022/2023末除籍者除く）

大図研出版物アクセス方法継続のお知らせ

例年，「大図研出版物ダウンロードに関するお知らせ」おはがきは，年始めに会員各位にお送りしておりますが，2024年分は未送付です。

このはがき送付についての運用変更を事務局および常任委員会で検討中であり，2024年3月開催予定の全国委員会にて，審議事項として議論する予定です。

方針決定までの間，2023年1月に送付したおはがきによる接続情報を継続いたしますのでご了承願います。

なお，お手元におはがきがない場合は，事務局組織担当 soshiki@daitoken.com までご連絡をお願い申し上げます。